

文化財を訪ねて

—見てある記—

桶川の遺跡を科学する

桶川には多くの遺跡がありますが、特に桶川を代表する遺跡としては、赤堀の後谷遺跡と川田谷の熊野神社古墳を挙げられるのではないのでしょうか。後谷遺跡は、縄文時代後期から晩期（約3300年～2800年位前）の遺跡であり、出土した土器や土偶・漆製品など600点以上が国の重要文化財に指定されています。写真の土偶は、デフォルメされているため宇宙人のようにも見えますが、細かく観察すると耳飾りをしていたり髪には櫛を挿している表現がされ、耳の部分には木質が残っていました。また、全面赤漆で塗られています。実際の出土品の中にも、堅櫛（髪をすいたり髪留めに使われた）や耳飾り（イヤリングではなく耳たぶに装着する）があり、当時の装飾などを考える貴重な材料にもなります。



後谷遺跡出土の
みみずく土偶

は、現在、市に
ては、現
品につい
品や木製
管されています。すぐに傷んでしまう漆製

次保存処理が行われており、貴重な文化財の保護を進めています。

熊野神社古墳は、直径30m・高さ6mの大形の円墳で、県指定史跡として保存されています。また、昭和3年の墳頂部の社殿改築の際に、玉類をはじめ石製模造品・銅製品などが出土しており、これらの出土物は、国の重要文化財として県立歴史と民俗の博物館で展示されています。

熊野神社古墳は4世紀後半の古墳ですが、碧玉や銅製品の出土品からは関西の勢力との関係がうかがえ、この地域一帯を支配した強大な地域政権が存在したことを物語っています。しかし、熊野神社古墳の約100年後には、行田市の平野の中に埼玉古墳群の造営がはじまります。川田谷の台地を中心にした、荒川下流域の左岸を治めた一族は衰退し、埼玉の地に巨大な古墳群を築く新たな勢力が現れたのです。熊野神社古墳が荒川の水上交通を



熊野神社古墳

の水上交通を

支配していたと考えられるのに対して、埼玉古墳群も元荒川水系を利用して埴輪や石材などの輸送を行っていました。両者には河川交通という交通網を掌握することで、大きな勢力として地域の支配を行っていたという共通点があるのです。

このように、桶川にも遠い先祖が残してくれた貴重な財産が多くあります。身近にあるこれらの遺跡や出土品をぜひ見学されてはいかがでしょうか。

桶川市文化財保護審議委員 井上 尚明



後谷遺跡・熊野神社古墳案内図